

第二邪宗門

北原白秋

青空文庫

円燈

飢渴

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

わが熱き炎の都、

都なる煉瓦の沙漠、

沙漠なる硫黄の海の広小路、そのただなかに、

饑^うゑにたるトリイトン神の立^{たちすがた}像^{ぞう}、

水涸れ果てし噴^{ふきあげ}水の大水盤^{めぐり}の繞^{めぐり}には、

白^{はくはうろう}瑛^{えい}瑯^{ろう}の石の級^{きだ}ただ照り渴^{しび}き痺^{しび}れたる。

そのかげに、紅^{あか}き襦^{しやつ}衣^いぬぎ

悲しめる道化芝居の触木うち、

自棄に弾くギタルラ弾者と、癪持と、

淫の舞の眩暈、

さては火酒かぶりつつ強ひて転がる酔漢と、

笑ひひしめく盲らは西瓜をぞ切る。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

既に見よ、瞬間のさき、

仄かなる愁の文にしみじみと

竜馬の羽うらにほひ透き、揺れて縋つれし

水盤の水ひとたまり。

あるはまた、螺を吹く神の息づかひ

焰に頻吹きひえびえと沁みにし歌も

今ははや空びぬ、聴くは饑ゑ疲れ

鉛になやむ地の管くだの苦しき叫喚さけび。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

虚空こくうには銅あかねいろ色いろの日の髑髏どくろ転びかがやき、

雲はまた血のごと沈黙しじもに鎔とろけゆき影だに留めず。

ただ病める東南風シロツコのみぞ重たげに、また、たゆたげに、

腐くされたる翼つばさの毒を羽ばたたく。

七月末の長なが旱ひでり、今しも真昼、

煉獄の苦熱の呵責かしゃくそのままに

火輪車くわりんしゃ駛り、石油泣き、瓦斯かわめの香喊かき、

真黒げに煙突震ふ狂ほしさ、その騒かしさ。

誰たれぞ、また、けたたましくも、

朱あけの息引き切るるごと、

狂気なす自動車駆るは。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

狂気者よ、人轢き殺せ。

癪持よ、血を吐き尽せ。

掻き鳴らせ、絃切るまで。

打ち鳴らせ、木の折るるまで。

飛びめぐれ、息の根絶えよ。

酔へよ、また娑婆にな覚めそ。

盲らよ、その赤き腸を吸へ。

あはれ、あはれ、

この早つづかむかぎり、

汝が飢渴癒えむすべなし。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

わかき喇叭

苦しげに喇叭吹く息、
苦しげに喇叭吹く息、
汝はゆきていづくにかへる。

心臓のあかきくるめき
それを洩れて吹きいつるなる。
なやましき霊のひとすぢ
いと冷やき水の音色に。

毒ふかき邪欲の谷に
淫楽の蝮まどふ、

はたや身は痺れ^{しび}とろけて
断ち^たがたきほだしに悩^{なや}む。

狂^{きやう}念^{ねん}のめくらむ野^の辺^べゆ
挑^{いど}み搏^うつ硫^い黄^{わう}の炎^{ほむら}、

また苦^{にが}き檻^{をり}のおびえに
くれなるの破滅^{はめつ}をさそふ。

さまだるる恋慕^{れんぼ}のあへぎ

蒸しよどみ、かくてなやめど

われは吹く、息もほつほつ

うらわかき霊^{たま}の喇叭^{らっぱ}を。

かげ暗^{くら}き恐怖^{おそれ}の垂^{たり}葉^は

そのなかに赤き実熟るる。

わが夢^{ゆめ}はあなその空に
濡^ぬれつつも燃^もゆる悲^{かなしみ}愁^{しみ}。

濡^ぬれつつも燃^もゆるかなしみ
そが犠^{にえ}牲^{せい}に吹^ふきいづるなる。
かぎりなき生^{いのち}命^{めい}の苦^く痛^{つう}
かぎりある胸^{むね}の力^{ちから}に。

あはれ、なほ、喇^{らっ}叭^ぱ吹^いく息^{いき}、
あはれ、なほ、喇^{らっ}叭^ぱ吹^いく息^{いき}、
汝^なはゆきていづくにかへる。

青き葉の銀杏のはやし

青き葉の銀杏^{いてふ}の林、

細^{ほそ}らなる若^{わか}樹^きの林。

はた、青^ひき白^ひ日の日^ひかげに、
葉^{ふる}も顫^{いて}ふ銀^{いて}杏^ふの林。

そのもとを北^{みち}へかすめる、
ひややけき路^{みち}のひとすぢ、

かすかにも胡^こ弓^{きゆう}まさぐり、
ゆめのごと、われはたどりぬ。

青^{いて}き葉^ふの銀^{いて}杏^ふの林
行き行^{みち}けど路^{みち}は尽^ききなく。

細^{ほそ}らなる若^{わか}樹^きのはやし、

頬^ほ白^{しろ}の鳴^なく音^ねもきかず。

すすりなく愁^{うれひ}の胡^こ弓^{きゆう}、

葉^はの顫^{ふる}ひ、青き日かげ。

さはひとり、われとさすらひ、
われと弾^ひき、聴^ききもほれつつ、

日もすがら涙さしぐむ、

青き葉のかげをゆく身は。

それとなきもののかぜにも、
弱^{よわ}ごころ耳しかたむけ。

たちとまり、ながめ、みかへり、

あはれさの絃^{いと}をちからに。

ひそやかに、また、しづやかに、
にほやかに尋^とめもなやめば。

薄^{うす}らなる青の絹衣^{すずし}も、

いつしかに露にしなえぬ。

さあれ、なほ弾^ひきゆく胡弓^{こきゆう}、
はてもなき路^{みち}のゆく手に。

いつまでかかくて泣きつつ、
いつまでかかくもあるべき。

あはれ、あはれ、銀杏^{いんげん}の林、

青き青き若樹わかきの林。

森の奥

森の奥ほのかにくらし。

夏のすゑ、長月はじめ、

あはれ、日も薄らうすらに、

薄うす黄ぎなる歎なげ沁きみゆく

浮羅はう爛の勤きの広葉の青み、

あるはまた大木おほきの胡桃くるみ、

憂わづらひ愁ひのかげのふかみに、

燃えのこる熱き日ざしは
黄に透かし暮れて薫れる。

そのなかに妙にしづかに
物おもふ白馬のあかり。

それやはた、夏の日の神
夕ぐれに騎りやわすれし。

紅の手綱の色も、

白がねの鎧も、鞍も、

いとほのに夢の照妙

ただ白し、ほのかに白し。

そをめぐり秋の笙の音しやうね
蕭やかにひそかに愁ふしめ。

響かふは角の音色か、つねねいろ
病める果か、饅えゆく歌か。みす

かくてまた暗き葉越に
鳩の笛沁みはわたれど。

薄黄なる光の透かし、うすぎ
ひとすぢの昨のほめきに、きのこ

ほの白う暮れてたたずむ
物おもふ色のしづけさ。

森はいまほのかにくらし。

円燈

薄^{くれ}暮^{がた}の谿^{たに}間^まの恐^{おそ}怖^{それ}。
今^こ宵^{よひ}またかなたに点^{とも}る
紅^{くれなゐ}の円^{まる}き燈^{ともしび}。

そを知るや、知らずや、なほも
なやましきにほひの奥^{おく}に
うづくまり黙^{つぐ}むひとむれ。

真^ま白^{しろ}なるゆめの水^{すゐ}牛^{ぎう}、
しかはあれど、なべて盲^めひし
獣^{けもの}らの重^{おも}き起^{おき}伏^{ふし}。

盲^{めし}ひしは瞳のみかは、
ものにぶく、闇^{やみ}にくぐもる
もろもろのこころごころも。

かくてあな幾^{いくよ}夜か経^へにし。
言^{もの}いはず、かうべもあげず、
さあれども物^{もの}待つごとし。

深^{ふか}みゆく恐^{おそ}怖^れの沈^{しじま}黙^ま。
そのなかに今宵^{こよひ}も消^きゆる
紅^{くれなゐ}の円^{まる}燈^{としび}。

と
尋^とめゆくあゆみ

四十一年六月

いと高いと深くいと静しづにいと蕭しめやげる
夜よの森のかげ、暗くらく冷ひやなる列つらねのものを、

われはあゆむ。

いと高いと暗みくいと密みつにいとほのかなる
細ほそらなる赤楊はんのきの列つらね、そのもとの底の底を

われはあゆむ。

いと高いと深く沈うみたる憂愁うれひのものを、
真素肌ますはだのましろなる、衣きぬつけぬ常とこ若わかの矜ほこりもて

われはあゆむ。

赤楊はんのきのとある梢ありとしも見へぬ空のけはひ、
あはれその枝に色紅べにき小鳥こどりの如も星の見ゆる。

あはれひとつ

いと高いと深^{しず}いと静^{しめ}にいと蕭^{しめ}やげる
夜^よの森のかげ、暗^{ひや}く冷^{つら}なる列^ねのものを、

われはあゆむ。

さあれ今^{もの}言^{けもの}いはぬ獸^あ忍^{さき}びやかに蹠^つきぞ来^きぬる。
昨日^{きのふ}より去年^{こぞ}より生^あれしより、否^{あらず}、前世^{さきのよ}より

蹠^つきか来^きぬる。

かかる夜^よのとある梢^{あは}哀^{あは}れその空に星の見えつ。

紅^{あか}き星紅^{あか}き星ほのかにもわれは知^しれり、

かかるゆめも。

いと高いと深^{ひや}くいと冷^{ひや}にいと蕭^{しめ}やげる

夜の森のかげ、ふとし、あな、路は落つる。

あらぬ谷間。

哀れ哀れあらぬ谷にいと暗く霊や落つる。
真素肌の悲哀よ血の香する荊棘のなかを

いかにわけむ。

足音のす、言いはぬ獣忍びかにひき帰すらし。
哀れまたひとつ星、見もあへぬ闇のかなたに

はたや消ゆる。

忽ちものの呻吟、やはらなる足に触れつつ
そここの血の荊棘あなやその暗き底より

赤子啼きいづ。

我子の声

われはきく、生れざる、はかりしれざる
子の声を、泣き訴ふ赤きさけびを。

いづこにかわれはきく、見えわかぬかかる恐怖に。

かの野辺よ、信号柱は断頭の台とかがやき、
わか葉洩る入目を浴びてあかあかと遙に笑ひき。
汽車にしてさてはきく、轆かれゆく子らの啼声。

はた旅の夕まぐれ、栄えのこる雲の湿に、
前世の亡き妻が墓の辺の赤埴おもひ、
かくてまた我はきく追懐の色とにほひに、
埋もれたる、はかりしれざる子の夢を、胎の叫を。

歸^{かへ}りきてわれはきく、ひたぶるに君抱くとき、
 手^{たち}力のほこりも尽^つきて弱^{よわ}心^{こころ}なやむひととき、
 たちまちに心^{こころ}つらぬく
 赤き子の高^{たか}き叫^{さけ}びを。

声なき国

声^{こゑ}もなき薄^{くれ}暮^{がた}の国、
 追^{おも}憶^ひのこなたなるほの暗^{くら}き闇^{やみ}、
 哀^{あは}れ、さは冷^{ひや}けき世^よの沈^{しじま}黙^{おそれ}、恐^こ怖^{おそ}の木^こかげ、
 何^{いづこ}処^こより見^みゆるともなく出^いて来^こし思^{おも}ひの女^{をみな}
 清^{きよ}らなる真^{ます}素^す肌^{はだ}の身^みの独^{ひとり}ほのかに暮^くる。

四十一年六月

声こゑもなき国の白楊はくやう、

列つらな長ながう両側もろがはに顫ふるへわななき、

色いろ青あをき蠟ろうの火ひのほの暗くらみおびゆるごとく、

広ひろきより狭せまみ暮よれゆく其その果はての遠とほき切きれ目に、

灰ほかなる噴ふき水みづの香かぞひとり密ひそかに泣なける。

声こゑもなき国のさかひに

すすり泣なくそのゆめよ、水みづのひとすぢ

かすかにも色いろ映うつり消きえも入はいる吐とい息きする時とき、

哀かなれ、さは光ひか匂ほはぬ色いろもなく声こゑもなき野のに、

ただ寒さむう涙なみだ垂たれ熟み視つめぬる女をみなおもひの思おもひ。

声こゑもなき国のかなたは

あかあかと色いろわかき追おも憶ひの空そら。

歡くわん樂らくの樂がくの音おとよ、悩なやみ添そふ甘かんき悲ひ哀あいよ、

たけくる れんぼ ゆめ こなた
猛り狂ふ恋慕の夢の此方には聞えこそ来ね、
くも きそ くれなゐ
雲はただ昨のごと紅の色にただるる。

こゑ をみな
声もなき女の思、

みつ くれ
熟視めつつ、ややにまた暮れもいためど、
ひそ たの ふきあげ
ただ密に頼みてし噴水のほひとだえて、
なからへ なやみ めろちあ
存命し悩の夢の曲節も見るによしなみ、
ますはだ ひやや いし
真素肌の身は悲し冷けき石になりゆく。

こゑ くれがた
声もなき薄暮の国。

おもひで そら
かくていま、追憶の空はあかあか、
くも ふる がく ね わなな
血のごとも雲は顫へ楽の音の慄くなかに、
ひらう せいたいごう かくもり まば
閃めくは聖体盒の香の曇、骨も斑らに
しらじら うか
白白と浮びちり、あはれ早や沈み暈めく。

幽潭

あはれ、こはもの静かなる幽潭の
深みの心——おもむろに澀みて濁る
波もなき胎のほひの水の面。
をりをり鈍き蛇のむれ首もたぐれど
いささかの音だに立てず、なべてみな
重たき脳の、幽鬱の色して曇る。

さるほどに日も暮がたとなりぬれば、
あたりの樟の薄ら闇しのびにつる
灰色の妖女の冷やきうすわらひ。
さあれど、ゆるにしづしづと髪曳きうかぶ
底の主面はかたく縛られて、
ただほの白き身をなかば、水よりいづる。

ややありて、息吹いぶきのゆめもやはらかに、
盲めしひし空をうちあふぎ、管くだかたづけて
吹きいづる石鱖しやぼんの玉たまの泡あわのいろ
ひとつびとつに円まろらかに紅あかみてのぼる、
これやかわかの若わかくいみじき血のほひ。
かくしてももの静しづやかにひとときあまり。

ふと、ひらく汀ひとみの瞳ひとみくろぐろと、
冷やにならびうかがへる妖女えうぢよのつらね
肋骨ろつこつの相摩あいするごとわらひき笑して
灰はひいろ色の髪音かみおともなくさばくと見れば、
そこここに首もたげゆく蛇のむれ、
ああまたもとの幽鬱いううつに主ぬし消えしづむ。

かくてまた、鈍く曇れる水の面、

濁れる胎のものが孕む音ともなしに、

静寂の深みに呻く夜の色。

ほど経て声も消えゆけば、ああ見よ、いまし

幽潭の鈍める空にあかあかと

のぼれる玉か、数しれぬ幾千万の新星の華。

急瀬

『暗い。』『暗い。』

聴け、夜に叫ぶ髑髏、急瀬の小石、

熟視むるは死よりも暗き鳩毒の

発作に頻吹く水の面、

聴け、わなわなとかたかたと千万歎く。

四十一年六月

時は冬、熊野の川の川上の如法の真闇、
峽^{かひ}の底。

『暗い。』『暗い。』

聴け、はや叫ぶ髑髏^{されかうべ}、急瀬^{はやせ}の小石。

さてはまた、聴け、齒を洗ふ血の流

ま^まくろ^{しろ}に滴^{した}る音ささと

はた、きしきしと泡たぎち噎^{むせ}びぬ、まさに

丑満の黒金雲^{くろがねぐも}の棺衣^{たれぎぬ}は七^{なな}岳^{たけ}めぐり、

風顫ふ。

『暗い。』『暗い。』

聴け、また叫ぶ髑髏^{されかうべ}、急瀬^{はやせ}の小石、

熟視^みむれど喚^{わめ}けど、水は蜷^{くちばみ}の

腹なし、縞もひた黒に

磨りては走る夜の恐怖、この夜もさらに
 琅玕の断崖づたひ投網うつ漁の翁の
 火も見えず。

『暗い。』『暗い。』

聴け、ひた叫ぶ髑髏、急瀬の小石、

今はかの末期の苦患ひたひたと

わななきほそる一刹那、

鯨より疾く、棹あげて闇より闇へ、

火もつけず、声せず、一人丈長の髪吹き乱し

舟きたる。

『暗い。』『暗い。』

聴け、今叫ぶ髑髏、急瀬の小石、

一斉に驚破と慄くひたおもて

かところ噛めば竜骨は
血の香か滴る鋸やすりを鑢はの刃もて
磨る如く、白歯をきしと一文字に、傷きながら
逃れさる。

『暗い。』『暗い。』

聴け、なほ叫ぶ髑髏されかうべ、急瀬はやせの小石、
瞬間たまゆらの膏油と熱き肉ししの香かに

狂へる慾は護謨の火の

断ちぎるるがごとひたわめく、呪詛のろひと飢うゑと

悔くと死と真黒に噎むせぶ血の底に歯を噛みながら
熟視みつめたる。

『暗い。』『暗い。』

聴け、なほ叫ぶ髑髏されかうべ、急瀬はやせの小石、

熟視^{みつ}むれど天^{てん}蝎^{かつ}宮の光だに
影せぬ冥^{みやう}府^ふ、わなわなと
喚^{わめ}けどさらに蝮^{くちばみ}は腹磨り奔り、
絶えずまた泡だち落つる血はささとその戦^わ慄^{なき}に
噎^{むせ}ぶのみ。

『暗い。』『暗い。』

聴^きけ、夜に叫^さぶ髑^{しかう}髒^べ、急瀬^{はやせ}の小石、

熟視^{みつ}むるは死よりも暗き鳩毒の

発^{ほつ}作^さに頻^し吹^ぶく水の面^{おも}、

なほ、きしきしとかたかたと嘆^{なげ}けど、哀^{あは}れ、

億^{おく}劫^{ごふ}の窮^{きはまり}あらぬ闇に堕^おち闇に饑^うゑゆく

人の群。

二つの世界

色あかき世界のなかに

うららにも小鳥さへづり、

色白き世界のなかに

ものにぶき駱駝^{らくだ}は坐^{すは}る。

ものにぶき駱駝^{らくだ}の見るは

白き砂、白き思の星、

えもわかぬ髑髏^{どくろ}のなげき、

ピラミドのたそがれの色

うららなる小鳥のうたは

また遠く、ひと世^よへだてて

脳^{なう}の内、もだえの熱^{ねつ}に、

謔^{うはごと}言のかずかずうたふ。

かなたには隊商^{カラバン}の鈴、

こなたにはあかきさへづり。

今日^{けふ}もまた境し立てる

スフィックスひとりしづかに。

スフィックス、恐怖^{おそれ}の沈黙^{しじま}、

そが胸^{しやうけい}の象形文字^{もじ}の

謎^{なぞ}も、あな、半^{なかば}しろく、

はた赤く、聴耳^{ききみみ}澄^すます。

あはれ、いま、白き世界の

ゆふまぐれ。しかはあれども

色あかき世界の真昼^{まひる}。

スフィックス、こころは惑^{まど}ふ。

暮れなやむ心のあそび

晩夏^{おそなつ}の暮れなやむ日のわがこころ
球^{びりあんど}突^つをばもてあそぶ、脳のくもりに
うしろより煙草のくゆり病ましげに、
なにともわかぬ思きて覗^{のぞ}く心地す。

玉ふたつわれの好^{この}める色したる、
また玉ふたつうち曇る白の円^{まる}みす。
棒^{きう}とりていづれか突かむ。うち見れば
萌黄の羅紗の台^{だい}の面^{おも}ほのに顫へる。

その嘆^{なげ}き、おぼろげながらわれぞ知る。

四十一年八月

いつのゆふべとわかねども負傷^{てお}ひし胸の
そのにほひ、棒^{きう}とりながらわれぞ知る。
かくてもやまぬわがあそび、色入りまじる。

そを見つつ後^{うしろ}にけぶすかの思

なにしか笑^{わら}ふ。さあれども暮^くるころは

色あかき玉もてあそびうちなやむ。

重き煙草にまどはしく眩暈^{めくら}みながら。

いづこにかものなやましきはなしごゑ

あるはきこゑて、ものあかくあかる心地す。

わが脳のなかに、室^{むろ}のうつつにか、

火点^{とも}るときそのけはひ、遊戯^{あそび}夜に入る。

四十一年八月

鑲工

静しづやかに泣きつつあれば、

わがこころ鑲もぎ工いくなしぬものとなく、――

正せい方はう形けいの鑲もぎ工いくのその壁かべをしも見まもれば

そはものにぶき顔おもの面おも、

面おものなかばを、やはらかき茎くきのうねりや、

あかあかと蔽おほひ燃もゆめる罌けし粟しのゆめ

そのかげに、

そのかげに、

盲めひたる白き眼めふたつ。

あはれその

白き眼めふたつ、

なにか見る、

夕ぐれのものゆふのしじまに。

天幕の中

色にぶき毛織けおりの天幕てんと、

そがなかにわがおもひひとりしあなる、

あはれ、盲しひたる白き目に花とりあてて、

そが紅あかき色見むものと燥あせりつつ、さは燥あせりつつ、

色にぶき毛織けおりの天幕てんと

いつまでかわれの思おもひのひとりしあなる。

髑髏は熟視みむ

髑髏どくろは熟視みむ、きゆらそおの血さかの酒甕がめの間あひだより、

四十一年八月

髑髏は熟視む、命なくただうち凹む眼して、
 髑髏は熟視む、忘れたる思ひいでんとするが如、
 髑髏は熟視む、寝そべりて石罅玉吹く女が面を。

樟の合奏

樟の合奏

初夏の空。
 灰白色の雲のもと。
 水沼のほとり。

ひと叢の樟のわか葉の黄金いろ
 梢も高く、

四十一年六月

濡れ濡るる雨後の夕のひとあかり、

入日に燃えて

潤やかに、華やかに、

調べあはする

かなしみの、

よろこびの、

くるしみの

香も狂ほしき生の曲……夢の合奏……

そのかげに、

赤き煉瓦の

変庄所、心盲ひし

高圧の電気の叫喚音もなく、

斜に走る銅線の

かきむしりゆく火の苦悩。

はたやオゾンの香のしめり、渦巻き縋れ、

昼も、夜も、

間なく、時なく、

ひたぶるに暈めき、醸す死の恐怖、

列ね立てたる柱には、

『触るる者かく死すべし。』と

髑髏あり、ひたと黙める。

また、見よ暗くところと、

曇り濁れる鈍色の水沼の面を。

病める壁、

樟の調楽

映せども映すともなきものの色。

ただに声なく、

命なく、

鈍く、重たく、

波たたず、

淀みもせなく、

なべてこれこの世ならざる日の沈黙。

鈍く、ぼやけし

忘却の護謨の面を圧すごとく、

掌に圧すごとく、

たまにのみ、太き最低音ぞ呻くめる。

しかあれ、初夏の夕あかり、

灰白色の雲の裏ゆ金覆輪に噴きいづる

光の樂のさと赤く、

照りかへし、湿潤に燃ゆるひとときよ、

あはれ斉しく、はた高く、

しめやかに、華やかに、

調べいでぬる管絃樂の生の曲――
しらべ いでぬる かんげんがく の せい きよく

かなしみに、

よろこびに、

くるしみに

くる 狂ひかなづる、

くる 狂ひかなづる、

くる 狂ひかなづる

くる 狂ひかなづる

樟くすの合奏がつさう……死しのオゾン……

さてもあはれ、夜よとならば

夜とならば如何いかにかすらむ。

いま、夕焼ゆうやけの変圧所へんあつじょ

嘲あざけるごとく、

はたや、かの虐殺^{ぎやくさつ}の血^ちを浴^あびしごと、
あかあかと笑^{わら}ひくるめく……

晩夏

くわと照^ゆらす夕陽^{ふひ}の光、
噴^{ふき}水の霧^{あけ}のしぶきよ。

湿^{しめ}らひぬ、蒸^むしぬ、ひかりぬ、
さは、苑^{その}の若木^{わかし}のたわみ、
花^{むら}の叢^{むら}、草葉^{くさば}のかをり、――
さまざまの薫^{かほ}るおもひに。

こぼれちる水のにほひよ。

四十四年五月

日のひかり、雲のうつろひ、
栄えしはぶく麝香の真珠、またま——
絶えず、わが夢かしたたる。

ふくらかに霧にうもれて
燃えたわむ色のうれひよ、
うつろひぬ、蒸しぬ、しめりぬ、——
ゆふぐれの胸のなごみを。

くわと照らす晩夏の光、
尽きせざる夢のしぶきよ。

蝸

胸に、はた、

実のひとつ落ちむとするを。

かなかなかな……かなかなかな……

夏の夜の舟

虫^{むし}啼^なける。

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

あはれわが小舟^{こふね}ぞくだる。
痕^{きず}つけるわかうどの舟^{ふね}。

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

はてもなう向^{むか}ひてかすむ

四十一年六月

白壁しらかべのほのかなる列つら。

そのかげを小舟はくだる、

蒸むし挑いどむ靄いどのふるへに。

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

いまし、また水路すゐろのはてに、

落ちかかる

弦月げんげつあかく、

そここのくらみの奥おくに

寝ねおびれて倦うめるものごとゑ。

りんりん……すりりん……

某それの夏なつ、

かかる夜の港にききし

二上りの音はじめはすれど、

あはれそをいづことわかむ。

あたりやや暗みふけつつ、

血のごとく

顫ふ月しろ

沈みゆくその香のなごり。

あなしばし、虫啼きしきる。

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

いつしかと真闇のほひ、

深^{ふか}みゆく恐^{おそれ}怖^{おそれ}につれて
はたと虫^{むし}息^{いき}をひそめぬ。
蒸^むしあつし、また息^{いき}ぐるし。

.....

舟^{ふね}はなほ重^{おも}たくくだる。
ふと窓^{らふ}に蟬^ひの火^ひあかり、
病^{やまうど}人の顔^{かほ}ぞいでたる。
内部^{うちら}には時計^{ひびき}の響^{ひびき}。

ぎいすちよつ.....

重^{おも}き咳^{せき}ふたたたびみたび、
真^ま黒^{くろ}なる帷^{とばり}は落ちぬ。

あはれ闇夜^{やみよ}。

ぎいすちよつ……………ぎいすちよつ……………

かくてなほ小舟^{をぶね}はくだる。

いづくにかはてなむ旅^{たび}ぞ、

そも知らね、水^{みづ}のひとすぢ、

白^{しろ}壁^{かべ}のはてしなき夜^よを。

ぎいすちよつ……がちやがちや……ぎいすちよつ……

たちまちに閉^{とざ}の扉^{しとびら}、

かげ暗^{くら}き大黒金^{おほくろがね}の壁^{かべ}のもと、小舟^{をぶね}はなづむ。

あなあはれ、

ものなべて見わかぬ闇^{やみ}よ、

内にはた悩みか伏せる
幾百の沈黙の大牛。
最終か、恐怖の淀か、
舟は、あな、音なく留まる。

りんりん………すりりん………

否、また、おのづからなる

抵抗のすべなき力

その水に舟押しながる。

ぎいすちよつ………ぎいすちよつ………

がちやがちやがちや………ぎいすちよつ………

がちやがちやがちや………がちやがちやがちや………

がちやがちやがちやがちや………がちやがちやがちやがちや………

はてもなう小舟^{をぶね}はくだる。

大曲『悶絶』

色赤きものごゑあまた

脳^{なう}をいで、とどろと奔^{はし}る。――

逃れゆくわれの足音^{あのと}か、

もの鈍^{けおり}き毛織^{ねすみ}の黝^{くろ}

蹈^ふみにじり、蹈^ふみにじり……………

ら、りら、ら、りら、

ほのかに雲雀^{ひばり}。

あはれいま砥石^{といし}のひびき、

鈍^{なまくら}刀のすべるひらめき。

そのなかを赤きものごゑ
血を滴し、とどろと奔る。

もの鈍き毛織の夢を

蹈みにじり、踏みにじり……

ら、りら、ら、りら、

かすかに雲雀。

はたと、あな、足音絶え入り、
ただひびく緩る鈍刀。

しづかなる皐月の真昼、

白雲はゆるかにのぼり、

軟^{なよ}ら風ゆらにゆるるる。

ら、りら、ら、りら、

さへづる雲雀。

いづこにかいづこにか揺曳^{ゆらび}ける絃^{いと}の苦惱^{なやみ}の……

『……ああはれ、よしなや、われらがゆめぢ、

かなしきその日の接吻^{くちづけ}にも……』

緩^ゆるやかにねぶたき砥石^{といし}。

『……かなしきその日の接吻^{くちづけ}にも、

さまたげ難^{がた}かる「我」のほこり、

ひたぶる抱きて涙^{なみだ}すれど恐怖^{おそれ}と苦惱^{なやみ}の……』

さあれなほものうき砥石^{といし}。

『……あはれ、よしなや、肉のおびえの――

汝が火のまなざし、

わが血のいどみ、

殺さむ死なむと朱に顫ふ……』

ら、りら、ら、りら、

ほのかに雲雀。

『……殺さむ死なむと朱に顫ふ……、』

聴くとなき黒牛オロンの火のきざし

見る見る野辺に渦巻きて悶絶すれば、

くわとあがる血しほの烟、

そのなかをわれのものごゑ

また見えてとどろと奔^{はし}る。

忍びかにひややかに清^{きよ}らなる水のさらめき――

さらめきに角^{つの}笛^{ぶえ}あかり、

かなしみの音^ねの吐息^{といき}ほのかにおこる。

はたと、また、足音^{あのと}絶え入り、

野はなべて黄^{たそがれ}昏^{くれ}の色。

ほのかなるにほひのそらに、

やや赤く地平は光り、

そここの水面^{みのも}より

すゑぎう
水牛^{すゑぎう}いづる。

水牛すゐぎうのしづけさや、
しづかなる角つのの音ねに物をしおもふ。

しかあれ、鈍なまくら刀の
すべる音おと、——砥石といしのひびき——

ら、りら、ら、りら、

ほのかに雲雀。

しづかにも坐すはる水牛すゐぎう、
戦慄わななきの、かなしみの唸うなりあげつつ、
おもむろにおもむろにあかる不思議ふしぎの
いと赤き西天さいてんながめ、
恐ろしき、あるものの迫せまりにふるふ。

いづこにか洩れきたるオオロンのゆめ……

『……そぞろ、あはれ、そぞろ、あはれ

恋の帆船ほづねの――

空そらいろ色の帆もちぎれ、波にぬれて――

けふ
今日また二人、

今日また二人、

かなしき島根をさしてかへる………』

また鈍き砥石といしのひびき

かなしき光に艫ろのためいき、

かなしき海ゆくわかき夢ゆめの

みそらにほのめく星の光、

ああいまずべなく、われら帰る。………』

ふと起る、この面^も彼^か面^もに嘲笑^{あざわら}ふ人の諸^{もろ}こゑ。

『……苦しき挑^{いど}みにせきもあへぬ

戀慕^{れんぼ}の吐息^{といき}に顫^{ふる}ふこころ、

嗚呼^{ああ}このなやみをいかにかせむ。

さあれど、すべなく帰^{ふたり}る二人。……』

高みゆく砥石^{といし}の響——鈍刀^{なまくら}の増えゆくすべり——

『……朱^{あけ}なる接吻^{くちつけ}、痛^{いた}き怨言^{かごと}、

ああまた再度^{ふたたび}抱き泣けど………』

また近く暗^{くら}き嘲笑^{あざけり}。

『……ああかなし、

かなしき光、

われらの光、

内^{ないしん}心^{しん}のかなしき瞳………』

たと跳^{をど}り逃^にぐる水牛^{すゐぎう}

あな、赤^{あか}き血^{けつ}浴^{よく}びしごともし啼^なき狂^{きやう}ひ絶^{ぜつ}望^{まう}の唸^{うなり}に奔^{はし}る。

大空^{おほそら}は見る見る月の面^{おもて}となり、

たちまち赤^{あか}き半^{はん}円^{えん}の盲^{めし}ひし如^{ごと}も広^{ひろ}ければ、

一時^{いちじ}に響^{ひび}く野^のの砥^{かす}石^{いし}、数^{かず}かぎりなき刃^はのにほひ――

はた、赤^{あか}き此^{この}面^{おもて}彼^{かの}面^{おもて}の嘲^{あざわら}笑^ひ……あまる空^{そら}なく

おほらかに広^{ひろ}み尽^{つく}くせる、大^{たい}月^{げつ}の恐^{おそ}怖^れの面^{おもて}、

爛^{ただ}れたる眩^{くら}暈^め三^{さん}度^{たび}、くわつとして悶^{もん}絶^{ぜつ}すれば

見るが間^まに血^{ちけ}烟^{むり}あがり、

逃^{のが}れゆく我^{われ}のものごゑ
また見えてとどろと奔る。

水^{すゐ}牛^{ぎう}の声………千^{せん}万^{まん}の砥^せ石^{いし}の響^{ひび}………
に^にが^があ^あざ^ざけ^けり
苦^くき嘲^{ちやう}罵^ま………は^はた^たや、な^なほ奔^{はし}る足^{あし}音^{おと}………

ら、りら、ら、りら、

ほのかに雲雀。

はたといま聾^{ろう}しぬる。

色………音………光………

大太鼓の印象

四十一年八月

跳りいづ、赤き獸、
おど けだもの

どんだん……………

とみかう見、円らに笑ひ、はた跳る。
まろ おど

どんだん……………

あなやいま街の角より人曲る。
まち かど まが

どんだん……………

また来る。
きた

どんだん……………

赤き獸はふと消えて幼子となり、
けもの をさなご

どんだん……………

電車線路を匍ひめぐる。人また見ゆる。
は

どんだん……………

あな、うち転ぶ人のむれ、音もころころ。
まろ おと

どんだん……………

幼子のうへに重なる。また転ぶ。
をさなご まろ

どんだん……

逃げんと呻く間もなく、ひびきものうく、

どんだん……

鈍き電車は唸り来る。はた、轆き過ぐる。

どんだん……

時に真白の雲の団街よりのぼり、

どんだん……

かき消ゆる人のあとより

どんだん……

また跳る赤き獣

どんだん……

とみかう見、盲ひて笑ひ、はた、傲る。

どんだん……

四十一年八月

眼ふたげば

眼^めふたげば鳥^{さへづ}は囀^{さへづ}る。

盲^{めし}ひたる色赤き世界のなかに、
疲^{さへづ}れたる鳥^{さへづ}は囀^{さへづ}る。

盲^{めし}ひたる色赤き世界のなかに、
また見るは肋^{あばら}のにほひ
光なく、力なく、さあれほのめく。

肋^{あばら}骨^{ほね}泣^なきかつ訴^{うた}ふ。

『わが骨^{ほね}はわが骨^{ほね}は色^{いろ}あかき心^{こころ}の楯^{たて}よ。
かくてはや終^{つひ}の墓^{おくつき}碑^{いし}。』

鳥^{とり}は囀^{さへづ}る。

『婆羅門の婆羅門の塩を嘗めつる
咎ゆゑに昼も夜もかくは啼くめる。』
いづこにか、さはきりぎりす。

盲ひたる色赤き世界のなかに、

力なきうめきのやから

騒ぎ立ち、鳥はさへづる。

はた消えてふと見ゆる顔。

その顔はあてに瘦せたるかの少女。

少女のなげく。

『あはれ、君、われはもや倦みも死なまし。』

鳥は轉る。

少女^{をとめ}の顔はややありて白き手となり、
疲れたる、葡萄酒を注^つぐ顫^{ふる}して

『紅^{あか}き酒、そはわが血潮、

ほどほどに吸^すひて去^いねかし。』

鳥^{とり}は囀^{さへづ}る。

はと眼^めひらけば、わがまへに赤^{あか}くちりかふ
光^{くわうせん}線^{せん}の光^{ひかり}の団^{たま}のめくるめき。

鳥^{とり}は囀^{さへづ}る。

また眼とづれば、泣^なきいづる骨^{ほね}の揺曳^{ゆらびき}、
人^{ひと}の顔^{かほ}。はた、きりぎりす。

とりさへづ
鳥は囀る。

かうほね

きけ、あけぼのの香炉に、
連弾つれひく夜半よはのそらだき

薄らひ、ほのにあかれば、
清搔すががき、やがてもはらに

ひとつの香かうのいろのみ

薫くゆりぬ、——あはれ、水みの面もの

後朝きぬぎぬ、——誰たをかかへすと、

さは水みなづき無月のつくゑに

香かうの火炷くや、かうほね。

青き酒

十呂盤

大いなる――

聞け、大いなる黒^{くろ}金^{がね}の巨^{きよ}人^{じん}の指は

絶えずわが紅^{こう}玉^{ぎよく}の数^{かず}の珠^{たま}を

弄ぶ。

何時^{いつ}よりか、知らず、

左^{たな}の掌^{でこ}の脈搏^うつ上に

水晶^{きやう}の星彫^{ぎやう}む白壇^{けだ}の柎^た

横たへつ。

見るは、ただ、

蛇^{じやばら}腹^{はら}に似^たたる掌^{なでこ}の暗^{ほり}き彫^{もの}刻^は
弾^{はじ}く指^{さし}、また昼^{ひる}と夜^よとも分^わかたぬ
天^{そら}の色^{いろ}。

わが珠^{たま}の
上^{あが}れば、ひとつ、劫^{がふ}の世^よに惑^{まど}星^{ほし}うまれ、
下^{くだ}る時^{とき}、億^{おく}年^{ねん}の栄^{えい}華^{くわ}は滅^{めつ}ぶ
加^か減^{げん}則^{そく}。

斯^はくて、わが
運^{はこ}正^びしき紅^{こう}玉^{ぎよく}の妙^{めう}音^{おん}楽^{らく}は
極^{ごく}みある命^{めい}数^{すう}の大^{だい}歡^{くわん}楽^{らく}に
鳴^{なり}りひびく。

光^{くわう}明^{めい}の

大千世界ひとときに叫喚つくる
恐怖おそれの日、はた、知らず、われと音ねに酔ふ
星の桁。

聞くは、ただ、
宏大無辺天空の寂じやくまく 寞まく 遠く
筆走り、たまたまに『差引』記しるす
夢の音。

さては、また、
わかき巨人が黒くろ金がねの高たか胸むねへだて
われは聞く、おほどかに鼓つづみうつなる
心しんの臓ざう。

はばたき

聞けとある 大海原おほうなばらのただなかは
ひねもすおも
終日重きあかがねの霧たちこめて
ゆたゆたに濤なみこそうねれ、日輪は
凄まじ、黒き血の塊くれと焦げて暈くるめく。

みるかぎり赤道下の炎熱に
鉛のごとき 鹹しほみづ水ほのほは炎と燃えて、
海蛇うみへびの鎌首高く、たまたまに
煌きらめき、さてはぶぶぶと青く沈みぬ。

物なべて気懶けだるし重し、わだのはら
溶とろけたゆたふ鬱憂ふさふさのうねりに疲れ
夜のごとも深まる吐息。しかすがに、
大寂静だいじやくじやうの空高く濃霧のうむをわけて

東より靈智の光しらしらと

見え、かつ、消えぬ、大鳥おほとりの強きはばたき。

青き酒

青き酒、——

など、汝いは否なむ。これやわが深みの炎ほのほ、

また永久とほの秘密しるしの徴、われと聴く

激しき恋の凱歌かちうたに沈みにし色。

ただ刹那、

千年ちとせに一度いちど現るかの星こそは、

われとわが醸かみにし酒の火の飛沫しぶき、——

濃き幻のしたたりに天そらさへ燂やけむ。

こを飲まば

刹那の刹那、歎く血の歓樂にこそ、――

痛ましき封蝟色の汝が胸も、

焦げつつ聴かめ、

この夜半に音なく響く管絃樂、

虚無より曳ける青き火の丈長髪を。

空罎

葡萄酒罎の上包、靈なるころも、

何の魔か、飽くなき慾の痙攣もて

かく引き裂り、むぎむぎと歩み棄てけむ。――

火の片ぞ素足にわれと泣かしむる。

いづくに行かば得らるべき命の糧^{かて}ぞ。

踏むはただ鉛の路の火の飛沫^{しぶき}、

死の色つづく高壁^{たかかべ}のつらねのそこを

蟻のごと匍ひもとほらむ末のすゑ。――

たちまち薫る酒の歌、蒸すかと思れば

赭^{あか}ら頬^ほの想^{おもひ}の族^{ぞう}らとりどりに、

はや、酔ひしれて狂^{たは}れきぬ、あな、わが血にぞ。

かくて、見よ、わが幻^{まぼろし}に転ぶもの

吸い尽くされし空^{から}の礪^{びん}――空^{から}なる命、

最終^{いやはて}の辻^{おそれ}の恐怖に、ふと青む。

炎上

焦げに焦がるる 我^{わが}心^{こころ}、そこしもなく聞ゆるは
執^{しふちやく}着^くの日の喚^{さけび}叫^{こゑ}、黒ずむ惡の火の羽ぶき、
油日照^{あぶらひでり}の四辻^{よつじ}は凄慘として音もなく、
雲なき空に電流の渦まき消ゆる断末魔。

もそろもそろに滯^{とどこほ}る鉛の電車、一^{ひと}片^{ひら}の
命の紙と蠟づけの薄葉鉄^{ぶりき}の人を吊るしつつ、
黒き煉瓦の息づみにひたぶる咽^{むせ}ぶ輪のほめき。
事こそ起れ、いづこにか、早鐘すらむ物の色。

驚破^{えんしゃう}、炎^{えん}上^{じやう}の火の光、見れどもわかぬ日ざかりに
みるみる長く十字劃^かきるすくむ帯^{さなだ}のいろ^{いろ}、
あなと、昏^{くら}めば、後^{しりへ}より、憂^{かつかつ}憂^{かつ}と だく^{だく} ふませ、

隙^{すき}こそあれや、たとばかり、鞭ひらめかし、
驀^{まつ}然^{しぐら}、

黒き甲と朱の色の蒸汽唧筒の馬ぐるま、
 跳りぞ過ぐれ、湯は釜に飛沫くわつくわと沸りたる

紅火

夜なり。二人、臨終の寝椅子に青み、むかひゐて
 毒酒を杯に。紅の燭こそ点せ。まのあたり、
 無言に凝視め赫耀の波動を聴けば、夢心地、
 浄華のわかさ、身も霊も紅く纏るる赤熱よ。

火は葡萄染の深帳、花毛氈や、銀の籠、
 また、羅のころも、緑髪、わかき瞳に炎上の
 匂香熱く、『時』の呼吸、瞬き燦る『追懷よ。』
 『恋』は華嚴の寂寞に蒸し照る空気うち燦る。

ときへ
時経ぬ唇は『楽欲』の渴に焦れ、心の臓
喘げば、紅火『煩惱』の血彩薫ずる眩暈よ。
しゅ
朱の蠟涙は毒杯の紫擾し照り霏く。

ろふ
今こそ蠟は瑠瑠に炎のころもひき纏ひ、
おと
音なく溶くる白熱に爛れ艶だつ弱ころ、
むこん
無言に泣けば『新生』の黄金光ぞ燃えあがる。

暮愁

暮れぬらし。何時しか壁も灰色に一室はけぶり、
ばんじやう
盤上の牡丹花ひとつ血のいろに浮び爛れて、
じやうじやく
散るとなく、心の熱も静寂の薫に沈み、
しよく
卓の上両手を垂れて瞑目れば闇はにほひぬ。

窓の外は物古りし街、風湿める香のぬくみに、
寺寺の梵音うるむ夕間暮、卯月つごもり、
行人の古めく傘に、薄灯照り、大路赤らみ、
柑子だつ雲の濡いろ、そのひまに星や瞬く。

わが室は夢の方丈、匂やかに名香なびき、
遠世なる暮色の寂に哀婉の微韻を湛へ、
髣髴と女人の姿光さし続く幾むれ、
白鳥の歌ふが如く過ぎゆきぬ、すべる羅の裾。

そのなかに君は在せり。緑髪肩に波うち、
容顔の清しき、胸に薔薇色の薄ぎぬはふり、
情界の熱き波瀾に黒瞳にほひかがやき、
領巾ふるや、夢の足なみ軽らかに現なきさま。

ああ、それも束の間なりき。花祭ありし夕か、
群衆ぐんじゆうのなだれ長閑かに時花歌街はやりうたまちを流れて
辻だしに山車練る日なり、行きずりに相見しばかり、
高華なる君が風雅みやびも恋ふとなく思ひわすれき。

今行くは追憶おもひでの影——黄金なす幻追ひて、

衰残の心の大路暮れゆけば顧みもせぬ
おほち

人生の若き旅びと、——くづをれて匂ゆかしみ
我愁ふ、追慕の涙綿綿と青む夜までも。

乱れ織

無花果の園

なにか泣く、野より、をとめよ、

無花果いちじくの汝なが園遠く

われは来ぬ。いざ眼をあげよ。

今日けふもまた葉かげ、実みがくれ、

甘き香の風に日あびて

語らまし。いざ手を交せ。

さは泣くや、夜にか、をとめよ。

汝なが園は焼けぬと。草も、

無花果いちじくの樹も実も無しと。

おお、なべて園はいたまし。

葉も幹も、ああ、実も香かもか、

草の床とこ——恋の巢までも。

さあれ、よし。白帕しらぎぬやはに
うるはしき汝なが頬ほの涙
まづぬぐへ。すみれのにほひ。

曾なて汝は春のほこりに、
なに誓ひ、いづれ惜みし
この恋と、その古園ふるぞのと。

ああ、園は野火のびに焼かれて
今は無し。——美うまし追憶おもひで
ただ胸の香かにこそにほへ。

さば尋とめむ、恋こひの歓楽よろこび。
今日けふよりは、野山のやまに、谷たにに、
百合ゆり、さうび、花はなの日の栄はえ。

ああ、かくて、終の愛欲。
火と燃えて身を焼く夜にも、
汝は泣くや、いかにをとめよ。

燕

燕は翔る、水無月の

雲の旗手の濡髪に。――

暗き港はあかあかと

霽れぬ、滴る帆の雫。

燕は翔る、居留地の

柑子色なす窓玻璃

ななめに高く。――ほつほつと

霧に湿らふ火のほひ。

燕は翔る、葉煙草と

牛オロン薫ゆる和蘭の

酒樓のまへを。——笛あまた

暮れつつ呻ぶ海の色。

燕は翔る、花柘榴——

濡るる埠止場の火あかりに。

かくてこそ聴け、艶女等が

猥らにわかきさざめごと。

珊瑚切

午さがり、

渚に緩き波の音。
なぎさ ゆる

少女はやがてあてやかに
をとめ

『何ぞ。』と答へぬ、伏眼して、
な いちめ

紅き珊瑚の枝あまた

撰みつ、切りつ、かろらかに
えら

鋸の齒のきしろへば、

ほそき腕と頬のうへに
かひな ほ

薔薇いろの靄さとけぶる。
ばら

ややありて、

渚に緩き波の音。
なぎさ ゆる

男は燃ゆる頬を寄せて
よ

『君をおもふ。』と忍びかに、

さては手速にうしろより
てはや

珊瑚細工の車の柄
え

かろく廻せば、ためらへる
しろうはぎの上衣と髪うはぎの毛に
薔薇ばらいろの靄さとけぶる。

のびやかに

渚なぎさに緩き波の音。

少女をとめは、さいへ、あからみて

『吾も。』とばかり、海の日を

玻璃に透かしつ、やうやうに

形かたちととのふ恋の珠たま

磨きつ、吹きつ、をりをりに

車くるままはせば、美しく

薔薇いろの靄さとけぶる。

乱れ織

——天草雅歌——

わが織るは、

火の無花果いちじゆくを綴りたる
 花哆囉はなとろめんの猩猩しやうじやうひ緋。

とん、とん、はたり。

さればこそ

絶えずをさ梭燃え、乱れうつ
 火の無花果いちじゆくの百濟くだらごと琴。

とん、とん、はたり。

聞き恍ほれて、

いつ
何時か、我が入る、しやうじやうひ猩猩緋
はなとろめん
花哆囉のまぼろしに。

とん、とん、はたり。

乱れ織、

落つる木の実のすががきに

ふところそうかべ、銀の楯。

とん、とん、はたり。

翻へす

ばいたらえふ
貝多羅葉の馬じるし

はなとろめん
花哆囉のまぼろしに。

とん、とん、はたり。

また光る

白かぶとき兜まちまんざの八幡座、

火いの無ち花果くの百くだらごと濟琴。

とん、とん、はたり。

乱れ織、

つと空はなとろめんゆくは槍つらの列。

花はな哆囉なとろめんのまぼろしに。

とん、とん、はたり。

さては見つ、

火いの無ち花果くのすががきに

君しやうじやうひが鎧しやうじやうひの猩しやうじやうひ猩しやうじやうひ緋。

とん、とん、はたり。

われは、また

花^{はな}哆囉^{とろめん}のまぼろしに
白^ひき領^{ひれ}巾^ふる。百^{くだら}濟^{ごと}琴^{こと}。

とん、とん、はたり。

そのときに、

馬^{うま}は嘶^{なげ}く、しらしらと、
火^ひの哆囉^{とろめん}の無^む花^{はな}果^けに。

とん、とん、はたり。

あはれ、いま

花^{はな}哆囉^{とろめん}のすががきに

再^{また}び擁^{いだ}く、君^{きみ}と我^{われ}。

とん、とん、はたり。

天^{そら}も見^みず、

被^{かつ}ぐは滴^{した}る蜜の音、
君が鎧^{しやうじやうひ}の猩猩^{しやうじやうひ}緋。

とん、とん、はたり。

こは夢か、

刹那^{まぼろし}か、尽きぬ幻か、
花哆囉^{はなとろめん}の梭^{をさ}の音。

とん、とん、はたり。

高機

——天草雅歌——

高^{たか}機^{はた}
に

梭なげぬ。

きり、はたり。

その胸に

梭なげぬ。

きり、はたり。

その高機に、

その胸に

きり、はたり。

顛末

——天草雅歌——

『花ありき、われらが薔薇^{さうび}、
摘まれにき、われらが薔薇^{さうび}。

かくて、また、何時^{いつ}としもなく

涸みにき、われらが薔薇^{さうび}。』

あはれ、炉^ろに凭^よればかならず、

顛^{もとすゑ}末^{もとすゑ}はかかりきといふ

わが姫^{をうな}、その日の薔薇^{さうび}、

『何ゆゑ。』と問へば、かくこそ、

火にいぶる紅^{したうづ}き轆^{したうづ}

つと退^ひきて噎^むせ入りながら、

『子らよ、そは、ああ、その薔薇^{さうび}

あまりにも紅^{あか}かりしゆゑ。』

ためいき

今しがた、夜会^{やくわい}ははてぬ。

花^{はな}瓦^が斯^すのほそきなげきに

絹^{きぬ}帷^{とばり}紅^{あか}き天鵝^{びろうど}絨^じ、

散^ちり藉^しける花束^{はなばた}のくづ、

おぼろげに室^{むろ}は青^{あを}みて、

うらわかき騎士^{きし}が拍車^{はくしゃ}の

音^ねの乱^{みだ}れ、舞^{まひ}の足^{あし}ぶみ、

頬^ほのほてり、かろきさざめき、

髪^{かみ}あぶら、あはれ、樂^{がく}声^{しやう}、

あたたかに交^{まじ}りみだれて

ゆめのごと燻^{くゆ}りただよふ。

そのなかに、水^{みづ}のつめたさ

ちらほひぬ、これや、一^{ひと}夜^やを

伴つれもなく青あをみしなへし
女をみなこ子こがわかきためいき。

時鐘

身にか沁しむ。——『わが世がたりも

はや尽ききぬ。興きようもなき事こと。

わかうどよ、紅あかき炬ろの火に

美しき足袋をな焼やきそ。

かの宵の恋にもまして

うそ寒ふき夜にもあるかな。』

老をうな嫗なかくつぶやきながら

力ちからなう柴折しばりくべぬ。

そともには雪やふるらむ。

燃ゆる眼にわかきは見あげ、

言葉なく、またうつぶきぬ。

ひとしきり、沈黙しじまやぶれて、

煤すすけたる江戸絵の壁に

禁軍の紅帽こうぼうあかり、

はちはちと火ひの粉飛ことびちり、しづまりぬ。

九時にかあらむ。

ああ今、目白僧園の鐘鳴りやみぬ。

若し

炉ろの椅子に我ありとせよ、

また火あり熾さかれりと見よ。

棚への上の小さき自鳴鐘めざまし

鳩いでて三つと鳴かぬ間、

わが唇くちは汝がくちに、

頸^{うなじ}まき、ただ火のもだえ、
また轆^{たび}の焦ぐるも知らね、
さいへ、夏、我やはた、
火の気^けなき炉^ろに椅子もなし、
人妻よ、安かれ、汝^{なれ}も。

たはれ女

『やよ、しばし、
そのうつくしきわかうどよ、
君はいづこへ。』『君は、など。』
『美^{うまし}男、あはれ、いつの日か
君に見えけむ。』『しかはあれ、
われはえ知らず。』『さな去にそ、
その御^み瞳^{ひとみ}のうつくしき、

いかで忘れむ。』『さあれ、など、』

『まづ、おきたまへ、原のぬし?』

『いな、』『さは知りぬ、蜂須賀の

君か。』『いな、いな。』『ほ、ほ、さても、

御歳^{みとし}は。』『十九。』『はしけやし、

法科のかたか。』『いな。』『いなど、

さらばいとよし。さて、君は

いづこへ。』『麻布、君は、また。』

ほほ、わすられぬ情^{こひびと}人を

招ぎに。』とばかり、かたへなる

自働電話の火のとびら

たわやに開^あけて、つと入りぬ。

驢馬の列

——かかる詩の評家に——

驢馬つらねまちの列ぞ街をゆく。

見よ、のろのろの練足ねりあしに、

鼻も眼もなきひとやから

載せて、うなだれ、呻によびたる。

驢馬つらねまちの列ぞ街を行く。

鳴くは通草あけびの变化へんげらか、

また、耳もなきひとやから

口のみあかくただれたる。

驢馬つらねまちの列ぞ街をゆく。

あはれ、終日ひねもす、手さぐりに

生なま灰色はいろの怪けのやから、
のへらのへらと鞭むちふれる。

驢馬つらねの列まちぞ街まちをゆく。

もとより、人の身ならねば、

色いろもにほひも歌うたごゑも

嗅かぐすべはなし、罵ののしれる。

驢馬つらねの列まちぞ街まちをゆく。

ただ戸かどに咲はなける罌粟けしひとつ

知しらえぬ汝等なれら、いかで、さは

深やき館かたの内ない心しんを。

驢馬つらねの列まちぞ街まちをゆく。

すでに罵ののしる汝なが敵あだは

はくば
白馬に抱く火の被衣かつぎ
せんり
千里かなたのくちつけに。

落雷

落雷

静まりてなほもしばらく

霧のぼる高たかはら原つづき

爛ただれたる「時」ははるかに、

恐ろしき苦悩をはこぶ。

驟にはかあめ雨 またひといくさ、

走りゆく雲のひまより

かろやかに青ぞら笑ひ、

日の光強く眩しく

野はさらに酷熱のいろ。

腥^{なま}くさきオゾンのにほひ

雫^{しづく}する穂麦のしらみ、

今裂けし櫟^{けやき}の大木^{おほぎ}

燥^いるがごと疼^{うづ}くいたでに

脂^{やに}黒くしたたるみぎり、

油蟬^{あせ}ちちと鳴き立つ。

根^ねがたには蝮^{まむし}さながら

髪^{かみ}あかき乞^{こつ}食^{じき}ひとり

仰^{おほ}向けに面^{めん}桶^{つつ}つかみ、

見よ、死せり。雷^{らい}火^{くわ}にゆがむ

土^{つち}いろの冷^{ひや}き片^{ぺん}頬^ほに

血^ちの雫^{しづ}——濡^ぬれて仄^はめく

一輪^{いちりん}の紅^{こう}きなでしこ。

長月の一夜（初稿）

長月の鎮守の祭^{まつり}

夜もふけて天は険しく^{そら}

雨もよひ、月さしながら

稲妻す、濃雲をりをり

鉛いろ赤く爛れて

野に高き軌道を照らす。

このあたり、だらだらの坂

赤楊^{はん}高き小学校の

柵尽きて、下は黍畑

こほろぎぞ闇に鳴くなる。

いづこぞや、女声して

重たげに雨戸^く躁る音。

大師道、辻の濃霧は、
こざり

馬やどのくらめきあかりに

幻燈のぼかしの青み

蒸しあつく、ここに破馬車
やれ

七つ八つ泥にまみれて、

ひつそりと黒う影しぬ。

泥^{ぬかるみ}凜^{なま}は物の汗ばみ

生^{なま}ぬるく、重き空氣に

新らしき木犀^{もくせい}まじり

馬槽^{うまぶね}の臭氣^{くさみ}ふけつつ、

懶^{もの}うげのさやぎはたはた

夏の夜の悩^{なやみ}を刻む。

足音す、生血のにじみ

しとしとと、まへを人かけ

おちうどか、はたや乞食か、

背に重きどうらん佩囊になひ、

青き火の消えゆくごとく

呻きつつ闇にまぎれぬ。

嗚呼おそれ今か畏怖の極み、

がちやがちや轡わ虫は調子はづれに

噪めきつつ、はたと息絶え、

落ちかかるこがね黄金の弦ゆづる

心臓あへぎの喘あへぎさながら

また黒きひつき柩ひつきにしづむ。

終列車とどろくけはひ。

凄まじき大雨のまへを
 赤煉瓦高きかなたは
 一面に血潮ながれて
 野は紅く人死ぬけしき、
 稲妻す、——嗚呼夜は一時。

蹠

海ちかき真闇の狭間、
 夜の火の粉まひふるなかに
 酒の鑊とりて透かしぬ、
 はしりゆく褐色の顔、
 汽車ぞいま擦れちがひぬる。
 かたむけぬ、うましよろこび、
 いな、胸にしらべただるる

煉獄の火のひとつく。

時に、誰^たぞ、こん、こん、か、かん、
槌^{あなうら}つらね、蹠^{あなうら}うつは。

糸崎と子らがよぶこゑ。

そぞろありき

風寒^{しはすつき}き師走^{しはすつき}月、その港を

われひとり、夕暮のそぞろありきす。

薄闇のほのかなる光のなかに

老舗^{しにせ}立つひと町^{やもめ}は寡婦^{やもめ}のごとく

われゆゑに面^{おもがは}変り、かくや病みけむ。

人あまた、はかなげにそともながめて

石のごと店^{みせみせ}に青みすわりき。

たまたまに、灯^{あかり}さす格子^{かうし}はあれど

柩^{ひつぎ}うつ槌^{つち}の音^{おと}ただにせはしく、

煉瓦^{れんが}つむ空地^{あきち}には、あはれ誰^{たれ}が子^こぞ、

心^{しん}中^{ちゆう}の数^{かず}へぶし拙^{つた}なげながら

音^ねもうるむ連弾^{つれびき}のかなしきしらべ、

いつになく旅^{りょ}人の足^{あし}をとどめて、

灯^ひは青^{あお}く柳^{やなぎ}立つ闇^{やみ}にともりき。

港^{みなと}には浪^{なみ}の音^{おと}も鈍^{にぶ}にひびらぎ、

灰^{はい}だめる氷^{ひさめぐも}雨^{あめ}雲^{うみどり}空^{そら}にみだれて

すそあかる黄^{あめ}いろの遠^{をち}に、海^{うみ}鳥^{どり}

煙^{けぶり}濃^{ほばしら}き檣^{かざり}の闇^{やみ}に 一^{ひと}列^{つら}

朱^{しゆ}の色^{いろ}の大き旗^{はた}鳴^{なり}きもめぐりぬ。

船^{ふね}はまた鐘^{かね}鳴^{なり}らし、かくて失^うせにき。

そのゆふべ君^{きみ}のかげ消^きえしかなたに、

さてもや、みえそめぬ海^{うみ}のかなたに

けふも見よ、木星の青ききらめき。

暗愁

なにごとぞ、夕まぐれ、人はさわさわ、
新開しんかいのはづれなる坂のあき地に
うづくまる。そこ、ここに煉瓦れんぐわ、石灰いしばひ、
高草たかくさの黄きにまじり、風ぞ冷えたる。

灰色はいいろのまろき石子いしこらはまろがし
据ゑ、やをら爪立つまちぬ、爺おぢが肩より
のぞき見みす。——様さま様のくらき呼聲よびこゑ
世のほかの町の闇けしほひさぐ気遠さ。

古井ふるゐあり、桁けたはみなくづれゆがみて

桔^{はねつるべ} 檣^{ほね} ギロチンの骨とそびやぎ、
 血はながる。赤ばみし蛇のぬけがら
 さかしまに下^{した}はこれ暗^{ほら}き死の洞。

人はみなめづらかに首^{くび}つきいだし
 おづおづと環^わぞ退^{しざ}る。あはれ男子^{をのこ}ら
 三人^{みたり}まで影薄う青み入りぬれ、
 そよとだに腰^{こしづな}綱^{はし}の端もひびかず。

時^とや疾^とし、ひよろひよろの青洋服^{あをやうふく}は
 わと前^{おも}へ面^{おも}がはり、のめり泳ぎつ。
 と見ぬ、いま、むくむくと臭^{くさ}き瓦斯^{わす}の香^か
 町^{まち}や蔽^{おほ}ふ、みるがまに黄^きばむ天^{そら}色^{いろ}。

驚^す破^はと、見よ、街道へまろびなだれて

西日する町の屋根、高き耶蘇寺、
ふりあふぎ人はみな面冷えぬれ。
風さらにひややかに草をわたりぬ。

灯ぞともる、支那床の玻璃に人見え、
あかあかと末広に光凍れば、
古煉瓦うづだかき原のくまぐま、
ほそぼそとこほろぎの鳴く音洩れぬる。

地獄極楽

『御覧ぢやい、まづ。』と濁ごゑ

屋根低き山家の土間は
魚燈油のくすぶり赤く、
人いきれ、重き夜霧に

朦朧と地獄の光景けしき

現げんじいづ。―あはれ鞭指さし、

案内者あないじやは茶いろの頭巾

殊勝しゅしょうげに念仏ぞすなる。

木戸にまた高く札うち、

蓮葉はすはなる金かなきり切はこゑと

老いたるが絶えず客よぶ、――

と見る、ただ赤丹あかには剥はげたる

閻魔王、青き牛頭馬頭ごづめづ、

講釈のなかばいちどに

がくがくと下したあご顎あご鳴らす。――

『評判の地獄極楽。』

胸むねわるき油煙あぶらけのにほひ

女子らが汗に蒸されて、

焦熱のこころあかあか

火の車、または釜うで、

餓鬼道の叫喚わめきしながら

人人が苦悩を醸す。

さはれ、なほ爺おぢは真面目まじめに

諳誦べんぷす、業ごふの輪廻りんねを。

孟蘭盆の寺町通、

猿芝居幕のあひまか

喇叭は節みだらに囃はやす。――

うち湿しめる沈ちんの青みを

稚子ちごあそぶ賽さいの河原は、

長長と因果こそ説け、

『なまいだぶ。』こゑもあはれに、

かたのごと、涙を流す。

ひと巡り、はやも極楽、
絵灯笼紅き出口は

華やげ楼閣そびえ、

頻伽鳥鳴けり。この時、

酒の香す、懐がく

徳利嘗め、けろり鐸ふる、

太鼻の油汗見よ。

『先様はこれでお代り。』

熊野の鳥

夜は深し、熊野の鳥

旅籠の戸かたと過ぐ、

一瞬時、——燈火青に

閨を蔽ふかぐろの翼
煽り搏つ羽うらを透かし

消えぬ。今、森として

冷えまさる恐怖の闇に

身は急に潰ゆる心地。

「変らじ。」と女の声す。

ひと呻く、熊野の烏。

丑満の誓請文

今か成る。宮のあなたは

忍びかに雨ふりいでぬ。

『誓ひぬ。』と男の声す。

刹那、また、しくしくと

痺攣む手脚のうづき、

生贄の苦痛か、あなや、

護符ちぎる呪咀のひびき。

はたと落つる、熊野の烏。
 と思へば、こは如何いかに、
 身は烏、嘴くちばし黒く
 黒金の重錘おもりの下に
 羽平はみらみ、打つ伏ふす凄さ。
 はた、固く、痺しびれたる
 血まみれの頭脳づなうの上ゆ、
 暗憚すくと竦すくまりながら
 魂たまはわが骸むくろをながむ、

我

時は冬、霜しもつき月げじゆん下旬、
 夜の一時いちじ、真闇まやみの海路うなぢ。

玄海か、朝鮮沖か、

知らず。ただ波濤はたうの響

だうたふと鞆たづと窓まどうつ暗くらさ。

門司もじいでて既にいくとき幾時。

いとど蒸やらいす夜来やらいの空は、

雨まじ交り雹ひょうさへ乱れ、

灘なだ遠く雷らいするけはひ。

不安ふあんいま、黒くろき旗はたして

死の海を船ふねゆく恐怖おそれ、

深しん沈ちんの極きはみ真黒まぐろに

点てん鍾しょうの悲音ひおんたまたま、

天候てんこうの険悪けんあくいよよ、

闇あん懺たんとわが夜はくだつ。

一室いつしつに見知る顔なし。

何ごとぞ、宵のほどより、

紅毛こうもうの羅面絃弾者ラベイカひきは

白眼しろめむき絶えず笑へり。

陰翳いんえいは彼が肋あばらに

明暗めいあんす一張一弛いちぢやういつし、

カンテラの青み吸ひつつ、

縞蛇しまへびの喘ぐが如し。

深夜しんやなり。疫病えきび顔やうがほに、

衆人しゆうじんは疲れ黄ばみて

銭ぜにひとつ投ぐる者なし。

乱撃らんげきよ、早鐘はやがね急に、

甲板は靴音高く、

『驚破すは。』『風ぞ』『誰たぞ巻け』『倒せ。』

『綱投つなげよ。』一時に水夫かこら

狼狽らうばいの銅羅声どらごゑみだ擾し、

『飛沫^{しぶき}』『それ^{それ}に^にるな』『立て。』と

口口に、巻き、投げ、昇り、

立ち騒ぐ刹那^{さつ}か、颯と

暴風の襲来^{襲来}迅く、

帆の半、帆ばしら、帆桁、

折れ、唸り、はためき、倒れ、

動揺す、奈落へ、天へ、

激瀾^{おほなみ}の鳴号^{おほなみ}淒く

轟轟^{ぐわう}と頭上^{ぐわう}に下に、

刻刻の不穩^{ひと}等しく

一室は齒の根もあはず、

惨たりな、垂死^{すゐし}の境^{さかひ}。

紅毛は笑ひつつあり。

ふと見れば何らの贅^{にへ}ぞ、

わが膝は眩^{まば}ゆきばかり

乱^{らんぱつ}髪^{ぱつ}の女人に温み、

華奢ながら清き容顔

夢^{ゆめ}みるか、青うゑまひぬ。

恋びとか、あはれ、抱けば

軽^{けいなん}軟^{なん}の吐息^{いき}すずろに

頬^ほ触^ほれぬ、薔薇^{さうび}の^{さうび}にほひ。

嗚呼^{しほし}暫時^{しほし}流離^{りゅうり}の胸も

脈絡^{ほのほ}の炎^{ほのほ}に爛^{らん}れ、

痛楚^{うめき}なる人が呻^{うめき}吟^{ぎん}も、

念仏も悲鳴も知らず、

情界の熱き愉楽に、

わが霊^{れい}は喘^{あへ}ぎ焦^こがれぬ。

何ごとぞ、一時に音し、
毬のごと五体は飛べり。

瞬く間、危急の汽笛

一斉の叫喚——うつつ、

秒ならず、後甲板は

懸命の格闘黒く、

『咄、放せ』短艇に魔あり、

權あげて逃路を塞ぐ。

目前の障碍——知らず

紅毛か、水夫か、女か、

他人なり——死ねやとばかり、

発止、余は短銃高く

一発す、続いて二発、

三発す。あはや横波

驀地頭上を天へ、

舳^{ちく}なかば傾く刹那、

しやしやしやしやと水晶簾ぞ

落下すれ、苦鳴もろとも

闇中の渦巻分時、

微塵なり。——水天裂けて

髣髴と白光走る。

眼ひらけば、小春のごとも

麗らかに空晴れわたり、

身辺は雑木^{ぞわきま}疎^{まば}らに、

名も知らぬ紅花^{むら}叢咲き

涼^{すず}風^{かぜ}の朝吹く汀^{みぎは}、

砂雲雀^{すなひばり}優にあがれり。

ああ、神よ、他人は知らじ、

我はわが生命^{いのち}の真珠

全きを今もながめて、
満腔の歡よろこび喜高く
大音に感謝しまつる。

吐血

罌粟けしばたけ畑日は紅あかあか紅と、
水無月の夕雲あか爛れ、
鳥鳴かず。顔火のごとく
花いづるわかうど一人ひとり、
黒漆のわかき瞳に
樂げうよく欲の苦痛を湛へ、
大跨に一步ふりむく。
極熱の恋慕の郊野
蒼然と光衰へ、

草も木も瀕死の黄ばみ、
夜のさまに凄惨たりや。
う、とばかり、刹那膝つき、
絶望に肺はやぶれて
吐息しぬ——くれないの花。

柑子咲く国

南国

ああ、君^{かへ}帰れ、故郷の野は花咲きて
わかき日に五月柑子^{さつきかうじ}の黄金^{こがね}燃え、
^{そら}天の青みを風ゆるう、雲もののどかに
薄べにのものとほりゆかし。——^{かへ}帰れ君、
森の古家^{ふるや}の蔦^{つる}かづら花も真紅^{しんく}に、

ひるが
翻へれ、君はいづこに、——北のかた

ひつぎ
柩まうけの媼さび、白髪まじりの

かんねぶつ
寒念仏、賢し比丘らが国や追ふ。

うついう
ああ鬱憂の山毛櫨の天、日さへ黒ずみ、

くちあま
朽尼が涙眼かなしむ日の鉦に、

はたけ
皇の林檎紅饅えて蛆こそたかれ。

しろう
帰れ、君、——筑紫平の豊麗に

あぶみ
白がね鐙、わか駒の騎士も南へ、

ひめ
旅役者、歌の巡礼、麗姫、奴、

つづ
絵だくみ、うつら練り続け。なかに一人、

かいだう
街道や藤の茶店の紅き灯に

しづ
暮れて花揺る馬ぐるま、鈴の静けさ、

よ
四とせぶり、君も帰らふ夕ならば

ともし
靄の赤みに、夢ごころ、提灯ふらまし。

朝ならば君は人妻、野に岡に、

白き眼つどへ、ものわびし、われは汀の
はなあやめ
花菖蒲、風も紫の身がくれに

御名や呼ばまし、逢見初め忍びしわかさ
あひみそ

薄月に水の夢してほそぼそと、

ああさは通へ、翌の日も、山吹がくれ
かよ
あけ

雨ならば金糸の小蓑、日には、
きんし
みの
だく

一の鳥居を野へ三步、駒は木槿に、
むくげ

露凍の忍び戸、それもほとほとと
つゆしみ
ど

牡丹花ちらぬほど前へ、そよろ小躍れ
ぼたんくわ
をど

薔薇みち、蹈めば濡羽のつばくらめ、
いばら
ぬれは

飛ぶよ外の面の花麦に。
と
も
はなむぎ

あれ、駒鳥のさへづりよ。

籬根近し、忍び足、細ら口笛
まがき
くちぶえ

琴やみぬ、衣のそよめき、さて庭へ、
きぬ

(それと隠れぬ。) そら音かと、(空は澄みたれ、
ね

また鳴らす。―ほほゑみ頬ほほに、浮うけあゆみ
棟あふちかしは、柏あふちかしはの薄ら花ほのにちる日ひの

君ならばそぞろ袂もかざすらむ。

はや午ひるさがり、片岡かたをかの畑はたに子こら来て、

早熟はやなりの和蘭覆盆子おらんだいちご紅べにや摘む

歌もうらうら。――風車かざぐるまめぐる草家くさやは

鯉こいのぼり吹きこそあがれ、ここかしこ、

里をんなの女をんなは山くちなし 梔くちなしの黄きにもまみれて

糯もちや蒸むす、あやめ祭まつりのいとなみに

粽ちまきまく夜よのかしきか、頬ほにも浮うかべて

わかうどは水みづに夕ゆふべの真菰まこも刈かり、

いづれ鄙しづびの恋もこそ。

君よ。われらは花ぞのへ、

夕ゆふ榮ばえ熱あつき紅べに罌げし粟かの香かにか隠かくれて

筒井つつみづつ振ふり分わけ髪がみの恋慕こほりびと

君^き吾^{われ}燃^もゆる眼^めもひたと、頬^ほずりふるへ
 そのかみの幼^{をさ}な追^{おも}憶^ひ——君知るや
 フランチエスカの恋^{こひ}語^{がたり}——胸もわななけ、
 人妻^{ひとづま}か、罪^{つみ}か、血は火の美しさ、
 激^{あつ}しさ、熱^{あつ}さ、身^{しん}肉^{にく}の爛^{ただ}れひたぶる
 かき抱^{いだ}き犇^{ひし}と接吻^{くちつ}け死ぬまでも
 忘れむ、家も、世も、人も、
 ああ、南国の日の夕。

恋びと

ああ七^{しち}月^{ぐわつ}、
 山の火ふけぬ。——花^は柑^な子^{かう}咲^じく野も近み、
 月白^{ぶだう}ろむ葡^ば萄^{たけ}畑^けの夜^よの靄^よに、
 土蜂^{すかる}の羽音^{はおと}、香^かの甘^かさ、青葉^{せい}の吐息^{といき}、

情慾の誘惑深く燃え爛れ、

仰げば空の七つ星紅く煌めき、

南国の風さへ光る蒸し暑さ。

はや温泉の沈黙——烏樟の繁み仄透き灯も薄れ、

歡語絶えぬ。——湯氣白う、

丁字湯薫る女の香、湿りただよひ

わが髪へ、吹けば艶だつ草生なか。

露みな火なり。白百合は喘ぎうなだれ、

花びらの熱こそ高め。頬に胸に

ああ息づまる驕楽の飛沫ふつつ

抱擁に人死ぬにほひ、血も肉も

わななきふるふ。

ああ七月、

ふと、われ、ききぬ——忍び足熱きさやぎを

水枝照る汀の繁木そのなかに。

さは近づくは黄金髪、青きひとみか、

また知らぬ、亜麻いろ髪か、赤ら頬か、

ああ、そのかみの恋人か、謎の少女か。

遠つ世の匂香あまき幻想に

耳はほてりぬ。うつうつと眼さへ血ばみて、

極熱の恋慕胸うつくるほしさ。

風いま燃えぬ。ゆめ、うつつ、足音つづきぬ。

身肉のわづらひ、苦き乳の熱に

汗ばみ眠れば心の臓、牡丹花の騒ぎ

瞬く間、あな頬は爛れ、百合のなか、

七尺走る髪の音、ひたと接吻け、

紅の息、火の海の、ああ擾乱や、

水脈曳き狂ふ爛光に、五体とろけて

身は浮きぬ。牡丹花ひとつ、血の波を焦がれつ、沈む。

靈場詣

行けかし、さらば南国の番の御寺へ。

春なれば街の少女が華やぎに、

君も交りて美しう、恋の祈誓の

初旅や笈摺すがた鈴ふりて、

大野のみなみ、菜の花の黄金海透く

筑紫みち列もあえかのいろどりに

御詠歌流し麗うらと練りも続く日、

軟かぜに絵日傘あぐる若菜摘、

法師、馬上の騎士たちも照りつ乱れつ

菅笠に蝶も纏るる暖かさ。

はじめ御山の清水寺。

風雅古る代の絵すがたか、杉の深みの

薄はくぎくら花も散りかふ古ふるみちを、

六ろく部、道だう心しん、わか尼あまのうれひしづしづ

鉦かねうつや、袖も湿うるふゆきずりに

霊れい場ぢやう詣まう、杖うたかろく、番の歌うたこゑ

華はなやかに、巡礼衆うけが浮うあゆみ、

峽かいは葉洩れの日のわかさ、風も霞かすみて、

春の雲白ういざよふ静けさに

鶯鳴つみけば、ちらちらと対たもとの袂もとへ

笈おひ摺ずるへ、薄ら花ちるうららかさ。

かくて霊地れいちの莊嚴ふるに古き杉立つ

大木たいぼくの霧きの石いし階きだほの青み、

白日ひるの灯ひともる奥おく深ふかさ、遠みかしこみ

絵馬堂へ、——桜またちる菅笠や、

音羽おとはの滝くれに紅なの唇あぐちも嗽そそがむ

街少女まちをとめ、思もわかき瞳して

御堂みだうのまへの静寂に鈴ふりならび
ぬかづくや、金きんの香炉かうろの薄けぶり、
羅蓋蓮華らがいれんげの闇縫やみぬうてほのかにそらへ
星ほしの如ごと仏龕みづしに光る燈明みあかしの
不斷ふだんの燐くゆり、内陣ないちんの尊たふとさ深さ、
先達せんだつに連れて献ささぐる歌うたごゑも
後世安樂ごせあんらくの願ねがかけて巡めぐる比丘びくらが
罪ならず、恋こひの風流ふうりうの遍歴へんれきに、
心も空も美しうあこがれいでし
君なればそぞろ涙なみだも薰かるらむ。——
あるは月夜の黄金こがねみち、菜の花ぞらの
星ほしあかり朧きらくろ煌めく野の靄もろに、
鬢びんの香吹かかれ灰ほのしろ白う急ぐ樂らしさ、
灯ひは街に、——しだれ柳やなぎの樾路なみきぢは
紅提灯べにちやうちんの軒のきつづき、桃ひなも鄙めく

雛祭、店のあかみに伏眼ふしめして

奉謝ほうしゃを乞こはむ巡じゅん礼れいの清すずしき、わかき、

夕霧なまに若人わかうど忍しのぶそぞろきも

艶なまめかぬほど、頬ほにゑみて鈴すずもほそぼそ

「普陀落ふだらくや」練ねれば戸かどごとの老御達ねびごたち

春のひと夜の結縁けちえんに招せうぜむ杖せうと

白髪しらがふり、転まろび、袖そでとる殊勝しゆしやうさや。

行けかし、さらば南国の番の御寺へ

春なれば街の習慣ならはし美しむ

恋の祈誓きせいの初旅や、母にわかれて

少女らと、朝な夕なの花巡り、

やがて遍路の悲愁かなしみに雲も騷立さわだち

花ちらふ卯月とならば故さとへ、

ああ妻なよび髪ねびて、我恋わがこひ待てる

新室にむろに帰りこよかし、いざさらば、

弥生やよひはじめの燕つばくらめ、袖すり光る

麗うらら日びを、君も行くかよ、杖あげて、

南無なむや大悲だいひの觀世音くわんぜおん、守らせたまへ、

朝風あさかぜに、ああ巡礼かしまだの鹿島立ち。

花ちる日

日も卯月うづき、ひとりし行かば——水沼みぬまべの緑のしとね、

身はゆるに寝ねなまし。風の散花ちりばなに、水生みづふの草に、

さざら波、ゆめの皺くちづけみの口吻くちづけに香にほふ夕ゆふべ

つねのごと花輪はなわ編みつつ君おもひ水にむかへば、

遠霞ふるしろむ山の、古城市ふるしろいちの壁、森の戸までも、

白寂しらさびの静けさ深さ、いと青に天そらも真澄ますみぬ。

ああ、君よ、ゆめみる人ひとの夕ながめ——汀白みぎはらみて、

木原こばらみち、薄ら花踏む里乙女、六部あきうど、商人

文^{ふみ}づかひ——それも恋路^{うけ}の浮^うあゆみ、誰^たへか——目^ま守^もれば

雲^{いりひ}照^{あけ}らふ落日^{あけ}の紅^{あや}に水^{あや}の絵^{あや}の彩^{あや}も乱^{あや}れて

眼^めも病^めまむ、ややに古^{ふる}代^よのうれひして影^{かげ}ちり昏^{くろ}み

はや暮^いれぬ。市^{いち}は点^ひ燈^{とも}夫^しせはしげに走^{はし}すらし。さあれ

葦^{やみ}かびの闇^{やみ}には鳩^うのほのなよび。小^こ野^のの鈴^のの音^の、

夕^ゆづつ^づのほのめき、ゆめの頬^ほ白^{しろ}のみやびやすらに、

風^{ふう}ぬるみ、髪^{かみ}にはさくら、くさに地^ちの歔^す歔^すふけつつ、

灰^ほに灯^ひは君^{きみ}が館^{やかた}に、妻^{さい}琴^{きん}の調^{てう}べ澄^{せい}む夜^よぞ、

花^{はな}やかに朧^{ろう}ろに耳^{みみ}はそのかみの日^ひをしも薫^くゆれ。

ああ平^な和^{ごみ}、我^{われ}はも恋^{こひ}のさみし児^こか、神^{かみ}に斎^いきの

環^わも成^{なり}りぬ。靄^もの青^{せい}みに静^{しず}ごころ君^{きみ}思^{おも}ふ暫^{しばし}時^{とき}

涙^{なみだ}もろ、あたりの花^{はな}に頬^ほをうづめ泣^なかましものか。

ああ、二人^{ふたり}。——君^{きみ}よ暮^ぼ春^{しゅん}の市^{いち}の榮^{はえ}、花^{はな}に幕^{まく}うち、
紅^くの花^{はな}氎^く敷^せく間^まの遊^{あそ}楽^{らく}や、大^お路^{ほち}かがよひ

潮する人数、風雅の衣彩に乱れどよむ日。
縦しや、また花の館に恋ごもれ、君が驕楽
琅玕のおばしま、銀の両扉、※※の室屋、
早や飽きぬ、火炎の正眼、肉の笑、蜜の接吻、
絵も香も髪も律呂も宝玉も晴衣も酒も
あくどしや、今こそ憎め。（樂欲は君がまにまに）
ああ君よ、賤の児なれば我はもや自然の巢へと
花ちる日、市をはなれて、鄙ごころ、またと歸らじ。

郊外

悄悄と我はあゆみき。

畑には馬鈴薯白う花咲きて、

雲雀の歌も夕暮の空にいぎよひ、

南ふく風静やかに、神輿の列遠く青みき。

かかる日のかかる野末を。

嗚呼暮色微茫のあはひ、

笙^{せう}すずろ、かなたは町の夜祭^{よまつり}に

水天宮の舟囃子^{ふな}。――夕^{ゆふ}ごゑながら

乾^ひからびし黄ぐさの薰^{かをり}、そのかみも仄めき蒸しぬ、

温かき日なかの喘息^{あへぎ}。

父上は怒りたまひき、

『歌舞伎見は千年のち。』と。子はまたも

暗涙せぐるかなしきに大ぞらながめ、

歔^{ききよ}歔しつつ九年母むきぬ。酸^すゆかりき。あはれそれより

われ世をば厭ひそめにき。――

鉦

人みな往にぬ、うすらひぬ。

森の御寺の夕づく日、

ほの照り黄ばむさみしらに

やがて鉦^{かね}うつ一人^{いちにん}の

その夜ぞこひし、野も暮れよ、

あはれ初秋、日もゆふべ、

落穂ふみつつ身はまよふ。

青空文庫情報

底本：「白秋全集」 岩波書店

1984（昭和59）年12月5日

入力：飛鷹美緒

校正：林 幸雄

2010年7月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

第二邪宗門

北原白秋

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>